授業改善推進プラン＜算数科＞

学校名　　旭町

算数	課題分析 （学力調査結果、定期考査、授業の実態等）	授業改善策	指導改善	補充・発展的指導計画
1年	・計算の技能に個人差があり、数の構成や加減計算を素早く処理することに課題がある。 ・文章問題では、問題場面や問いを正確に捉えずに立式することがある。 ・自分の考えをもち、友達の考えと比べたり説明したりする経験をさらに増やす必要がある。 ・具体物を操作した経験を、絵・図・式・言葉へ結び付けて表現することを継続して指導する必要がある。	・半具体物、図、絵、動作化を用いて問題場面を捉える活動を充実させる。 ・文章中の大切な言葉や問いに着目して、立式の根拠を説明する場を設ける。 ・具体物→絵や図→式→言葉の順に表現をつなぎ、「なぜこの式になるのか」を考えさせる。 ・計算カードやタブレットを活用し、短時間の反復練習を継続する。	・児童のつまずきを授業中に把握し、数の構成・計算・文章理解のどこで困っているかを見取って支援する。 ・「まず考える→近くの友達に伝える→全体で比べる」の流れを定着させ、発言しやすい問いを工夫する。 ・「どうしてこの式にしたの？」と問い、答えだけでなく考え方を言葉で表すことを促す。 ・TT、学力向上支援講師と事前に支援方法を共有し、個に応じた言葉掛けを行う。	・10までの数の合成・分解、加減計算を反復する。 ・つまずきのある児童には具体物に戻って個別指導を行う。 ・文章問題では、絵や図を使って問題場面を表す活動を補充する。 ・習熟した児童には、絵や言葉を用いた問題作り・お話作りに取り組ませる。
2年	・繰り上がり・繰り下がりの計算や九九など、基礎的な技能に個人差がある。 ・長さやかさなどの量感、単位の意味を十分に捉えられていない児童がいる。 ・問題文を読み飛ばしたり、見直しをしなかったりすることがある。 ・友達の考えを比べ、自分の考えを説明する力に課題がある。 ・操作した結果を図や式と結び付け、数量関係を説明する経験をさらに増やす必要がある。	・授業始めに基礎的な計算練習を継続し、素早く正確に計算する力を育てる。 ・具体物・半具体物・図を用いて量感や単位の意味を実感させる。 ・文章題では、大切な言葉や問いに線を引き、立式の根拠を説明させる。 ・図、式、言葉を行き来しながら数量関係を捉えさせる。 ・複数の考えを比較し、分かりやすさや共通点を考える時間を設定する。	・授業中のノートや発言から、計算手順・問題理解・量感のどこに課題があるかを把握し、即時に補う。 ・「なぜそう考えたの？」など理由を問う発問を増やし、答えだけで終わらない指導にする。 ・問題解決後に「答えは問題に合っているか」を確かめる習慣を付ける。 ・学力向上支援講師と児童のつまずきを共有し、支援内容をそろえる。	・九九、繰り上がり・繰り下がりを継続的に反復する。 ・理解度別のプリントやドリルパーク等を活用する。 ・量と単位について、実際に測る・比べる活動を補充する。 ・必要に応じて個別指導を行い、習熟した児童には複数の解法を比べる課題を用意する。
3年	・九九の定着や計算処理に個人差があり、除法や繰り下がりの計算に影響している。 ・時刻・時間を求める問題など、数量関係を捉えることに苦手意識をもつ児童がいる。 ・図、表、数直線等を活用して考えを説明する力や、誤答を分析して見直す力に課題がある。 ・既習事項を新しい問題の解決に生かすため、数量関係を可視化して考える経験を増やす必要がある。	・系統性を重視した練習問題を朝学習等で活用し、基礎技能を確実にする。 ・具体物・半具体物から図・式・言葉へ段階的に表現を移行させる。 ・時刻・時間では時計や数直線を活用し、時間の経過を視覚的に捉えさせる。 ・間違いを教材として取り上げ、どこで考えが変わったのかを説明する活動を行う。	・小テスト、ノート、発言等を活用して理解状況をこまめに把握し、授業内で補充する。 ・既習事項とのつながりを明示し、「何を使えば解けそうか」を考えさせる発問を行う。 ・見直しを「答えの確認」だけでなく「方法・理由の確認」として指導する。 ・児童の考えを図・式・言葉で表現させ、互いの考えの共通点や違いを捉えさせる。	・九九、除法、繰り下がり計算を重点的に補充する。 ・苦手な項目は前学年の内容に戻って指導する。 ・文章問題では、問題場面を図に表す活動を個別に補充する。 ・習熟した児童には応用・発展問題や別解の説明に取り組ませる。
4年	・基礎学力の定着に大きな個人差があり、九九、乗除筆算、単位換算等でつまずきが見られる。 ・図、表、数直線を用いて考えを表現することに課題がある。 ・計算、作図、分度器・コンパスの操作など、知識・技能を確実にする必要がある。 ・既習事項を根拠として新しい問題を解決し、その考え方を説明する力をさらに育てる必要がある。	・既習事項とのつながりを確認してから新しい内容に入る。 ・筆算や作図は、手順だけでなく「なぜその手順になるのか」を図や言葉で確認する。 ・図、表、数直線、式を関連付け、数量関係を整理してから解決方法を選択させる。 ・少人数指導を生かし、児童の考えを交流する時間を確保する。 ・デジタル教科書等で操作や図形の動きを視覚化する。	・レディネステストや授業中の確認問題から、個々のつまずきを把握して指導内容を調整する。 ・「できたか」だけでなく「どこまで自力でできたか」を記録し、次時の指導につなげる。 ・誤答の傾向を学年で共有し、共通する指導事項をそろえる。 ・「なぜその方法で求められるのか」を説明させ、知識・技能と数学的な見方・考え方を関連付ける。	・必要な児童には中休み等の補充指導を行う。 ・習熟に応じたプリント、ドリルパーク等を活用する。 ・既習事項の不足が大きい場合は前学年の内容に戻って補充する。 ・習熟した児童には、複数の方法による解決や説明、条件を変えた発展的な課題を設定する。
5年	・既習事項を活用した課題解決に個人差があり、図や数直線等を用いて説明することに課題がある。 ・基本的な計算技能にも個人差がある。 ・友達の考えを聞いて比較することはできるが、そこから自分の考えを深めることに課題がある。 ・割合や分数など、数量の関係を図や数直線で捉え、式と関連付けて説明する経験をさらに充実させる必要がある。	・単元導入や授業前半で既習事項を振り返り、現在の学習とのつながりを明確にする。 ・割合や数量関係では、数直線や図を活用して数量の関係を可視化し、式と図を往還させる。 ・誤答、途中式、図、数直線などを教材として取り上げ、多面的に考える場を設定する。 ・児童の考えを比較・関連付け、考えを深める交流を充実させる。	・児童の表現を丁寧に見取り、考えが止まっている箇所に応じて段階的なヒントを提示する。 ・「どこが同じ？」「どこが違う？」「前の学習と何がつながる？」など、比較・関連付けを促す発問を意図的に設定する。 ・計算技能と数学的な説明の両面を評価し、次の指導に反映する。 ・解決後に条件を変えて考えさせ、学習した知識を別の場面に活用する機会を設定する。	・基礎計算や作図を継続して補充する。 ・ドリルパーク等で個人の課題に応じた学習を進める。 ・図や数直線を用いた数量関係の理解を補充する。 ・習熟した児童には、複数解法の比較や条件変更問題、作問など発展的課題を設定する。
6年	・基礎学力の定着に大きな個人差があり、既習事項の不足から新たな課題解決が困難な児童がいる。 ・計算問題に比べ、文章問題の正答率が低い傾向がある。 ・図・式・言葉を用いて、なぜその答えになるのかを説明する力に課題がある。 ・既習事項を活用して問題を解決し、複数の考えを比較・関連付けてよりよい方法を考える力をさらに育てる必要がある。	・授業前半で既習事項を確認し、小さなステップで課題解決に進めるようにする。 ・文章題では、数量関係を捉えるための図、線分図、数直線等を活用し、立式の根拠を説明させる。 ・「何が分かっているか」「何を求めるか」「どの既習事項を使うか」を整理してから解決させる。 ・児童の多様な考えを比較し、解法のよさや共通点を考える時間を確保する。	・レディネステスト、授業中の確認問題、ノート等から理解状況を把握し、指導を柔軟に調整する。 ・「どの既習事項を使ったか」「なぜその式になるか」を問い、根拠を明確にする指導を徹底する。 ・解決後は、答えだけでなく方法や理由を振り返り、誤答があった場合は原因を説明して修正させる。 ・教科書を基本としつつ、コースごとの理解状況に応じて課題量・支援・発展課題を調整する。	・既習事項の不足が大きい児童には前学年まで戻って個別指導する。 ・文章問題の読解・数量関係の把握を重点的に補充する。 ・図・式・言葉を関連付けて説明する活動を補充する。 ・習熟した児童には、複数の解法の比較、条件変更、説明・作問等の発展課題に取り組ませる。